

太平洋戦争-インパール(ウ号作戦)第一部

新発田駐屯地援護室 佐藤 和敏

昭和十四年八月、ノモンハン事件当時の新発田歩兵第十六聯隊長（第二十四代）宮崎繁三郎大佐は、昭和十九年三月のインパール作戦時、第十五軍第三十一歩兵団長（少将）として高田歩兵第五十八聯隊を指揮しました。

この当時、軍備改変で仙台師管新潟聯隊区に変更となり、以降新発田歩兵第十六聯隊が補充担任部隊となりました。その為、歩兵第五十八聯隊又、歩兵第八十六聯隊（この聯隊は朝鮮羅南で編成された歩七十六が前身です）の要員を補充し戦地に送っています。このような関係から、インパール作戦（ウ号作戦）の概要を紹介したいと思います。

ここでは左突進隊（長、宮崎少将）の基幹部隊であった、歩兵第五十八聯隊を中心に紹介致します。

明治四十三年、日露戦争直後の軍備拡張で第十三師団が新設され、高田の歩兵第五十八聯隊が創設された。聯隊は、歩兵第十六聯隊（新発田）村松の歩兵第三十聯隊（村松の後に高田）と同様、越佐健児を主体として編成されました。大正八年のシベリア出兵当時、歩兵第五十八聯隊の一個大隊は第五師団長鈴木壯六中将（三条市出身）の指揮下に入り、チタ方面にて勇戦奮闘し軍司令官より軍最高の榮譽ある感状を授与されています。

その後「軍縮」の折、歩五十八聯隊は廃止となり支那事変に及んで再生し、第十三師団（仙台）の有力なる一骨幹をなした。

支那事変では、歩五十八聯隊は優秀なる倉林、山村各聯隊長指揮の下に、徐州に漢口に又宜昌に到る所、越佐健児の本領を發揮し勇戦した。更に太平洋戦争に突入してからも、インパール作戦、イラワジ会戦等に参加し真価を發揮、内外にその武勲を恣にした。

歩五十八聯隊（長、福永大佐）は、歩兵第二十六旅団の骨幹として昭和十八年の始め、中支よりマライ半島に移動し、数ヶ月訓練に精進した後、新設第三十一師団の基幹部隊となりビルマに進駐して一意専心印度遠征の諸準備に努力していた。

第一線部隊の作戦準備として一番重要なことは、戦力の増強、即ち幹部教育と実践的猛訓練であるが、ここでは一寸違った準備を実施した。

其の一に歩兵団長は、ビルマ人が日本人に酷似しているのを利用し、マライ半島からビ

ルマに進駐すると間もなく各歩兵聯隊に諜報要員として、各々十名の適任者を選定しビルマ語の習得、ビルマ人の風俗、習慣等研究し教育、六ヶ月後にはビルマ人と判別が付け難いまでになり、便衣（ふだん着）斥候に仮装させ情報収集勤務に就かせた。

インパール作戦準備期間、チンドウィン河を越えて斥候を派遣することは、日本軍の企図秘匿上厳禁されていたが、歩兵団長の独断を以って、便衣斥候を我が各縦隊の経路上に派遣して緬印（ビルマ、インド）国境内の状況を明らかに知ることが出来た。

其の二は野草の研究である。本作戦のポイントは「補給の成否如何にあり」と我が将兵一同自覚していたが、勿論上司の要求もあるので第一線部隊としては後方よりの「補給なき場合如何にして之を克服するか」些少なりとも食料の不足を緩和出来るようにと、真剣に食用に供し得る野草の研究をした。ある時馬と一緒に、雑草を食っている夢を見たこともあった。

本作戦の最大の鍵である補給の欠陥を補う手段として、生牛、生山羊を多数連行することになった。これは軍司令官の牟田口中将の発案として、牛一頭約十五円、山羊一頭約五円にて買い集められ、歩兵団司令部に牛百二十五頭、歩兵各大隊に約一千頭程配分された。

ビルマの牛は物資を駄載することを本質的に嫌うので、これに慣れさせるのが大変であった。又、チンドウィン河のような大河を渡河させるため、駄牛部隊はよく訓練していたため殆ど支障も損害も無く順調に出来たが、其の後の一日行程の過大と、難路、特に駄牛の飼料不足のため大部分が途中で斃死し、目的地のコヒマに到着したのは瘦躯の五頭（歩兵団司令部用の牛）に過ぎなかった。駄牛携行の着想は必ずしも悪くはなかったが、特に飼料、行程等の研究が不十分であったため、本案は失敗に帰した。

コヒマ占領の任務を有する第三十一師団は、コヒマ方向に通ずるあらゆる山道を利用し三縦隊となって前進した。右突進隊は歩兵第百三十八聯隊第三大隊を主とする部隊、中突進隊は師団主力及び歩兵百三十八聯隊（第三大隊欠）を主とする部隊、左突進隊は宮崎少将率いる歩兵団司令部及び歩兵第五十八聯隊を主とする部隊とした。左突進隊は更に山地攻撃の要領で三縦隊の猛進隊（右、歩百三十八聯隊第一大隊、中、歩五十八聯隊第二大隊、左、歩五十八聯隊長率いる第三大隊）となって、先ず中間目標であるウクルルに向い突進を開始した。

（進撃開始）

愈々昭和十九年三月十五日、印度遠征の幕は切って落とされた。この日午後十時半を期して、全軍一斉にチンドウィン河の敵前渡河を実施した。其前の晩までは我が頭上に毎晩幾回となく敵機の往来が頻繁で心胆寒からしめたが、幸いこの十五日の晩だけは全く敵機は姿を現わさなかった。渡河した各縦隊は正に弦を放れた矢の如く破竹の勢いを以って進撃を開始した。

各猛進隊共十七、八日頃印緬国境を突破し險難なる山路を途中二～三回、数百の敵の前進部隊を蹴散らしつつ、唯々コヒマ、コヒマへと急進した。

各突進隊の進路は、どれも言語に絶する險悪で道路とは名ばかりの焚き木道、土人群が遠く塩を求めに旅行する間道、あるいは小路で、各重火機はすべて分解して殆ど臂力（ひりょく：腕の力）搬送をした。

印緬国境からウクルル平地までの地形は、標高千五百～三千メートルに達する山岳の連続地帯で、それでも山頂に到れば涼風あり、谷底に降りれば清流ありで将兵は互いに激励し合いつつ一名の落伍者もなく名称の通り猛進を続けた。

最初上司の命令に「患者（負傷者、病人）は後送することなく、各部隊毎に責任を以って前送せよ」とあり、何でもかんでも前進あるのみであった。中猛進隊（歩五十八聯隊第二大隊）は三月二十一日十時、ウクルルを占領した。同地に居た約一個大隊の敵は一戦も交えることなく南方に逃走しサンジャック附近の概設陣地に合流した。

サンジャックはインパール～ウクルル道上インパール東北方約五十キロメートルにある一関門をなす要衝で、諸情報を総合するとサンジャックには、砲十数門を有する約一個旅団の敵が拠っていることを知った。

三縦隊の中で、中間目標であるウクルルを第一着に占領した中猛進隊の士気は正に衝天の勢いで、一個旅団位の敵は実に鎧袖一触（がいしゅういつしよく：いともたやすく相手を負かす）の意気に燃えていた。中猛進隊長、長家大尉は、部下大隊独力を以って確実に本敵陣攻略が可能であると信じ、左突進隊長の許可を得て早速二十二日、夜襲を実施し一挙に敵陣地を奪取することを企図した。

（夜襲）

長家大隊長は第八中隊を第一線、第五、第六中隊を第二線として夜襲を準備し、三月二十三日午前三時を期し第八中隊は猛然突撃を敢行、最先頭は愛用の日本刀を振り翳して突進する中隊長、伴中尉で「中隊長二続ケ」「中隊長ヲ殺スナ」と部下将兵一団となって突入、俄然猛烈なる銃砲声、手榴弾の炸裂音、全山火を噴くかと思われた。

剣道の達人である伴中隊長は、手練の早業で敵兵数人を斬って落とした。この時既に数ヶ所の負傷にも毫も意に介せず、更に敵陣内深く突入し、実に壮烈なる戦死を遂げた。又、小隊長馬場少尉以下よく勇戦したが、熾烈なる敵火力に倒れるもの多く、早々成功の見込み無と判断した長家大隊長は、第二線部隊を提げて殴り込み夜襲を実施した。

正に阿鼻叫喚、熾烈なる銃砲声の間に聞こえる「天皇陛下万歳」の声。戦友の屍を乗り越え、乗り越え、突撃を敢行したが遂に成功するに至らず、払暁になっても敵の火力は熾

烈を極め、サンジャック南側高地の敵方斜面に進出している各中隊を一先ず南側高地の安全地帯に收容することが先決で、飯吉中尉の指揮する機関銃隊主力と第五中隊の軽機を以って一斉に援護射撃を実施した。

敵方斜面に進出して、動きのとれなくなっている大隊本部及び各中隊を辛うじて九時頃までに收容する事ができた。部下思いの長家大隊長は左頸部の受傷箇所から鮮血を流しながら「伴中隊長以下の骨が拾えないのが残念だ」と男泣きに泣いていたのが印象的であった。

敵は教会陣地を中心にして、遂次増強している有様は手に取るように我が方から見えた。そして正午頃からは迫撃砲の集中砲撃が激しくなり、火弾を加えて我が陣内の焼却戦鬪を企図しているようであった。其中に敵は我がサンジャック南側高地の陣地に対し逆襲を反覆実施して来たが其つど之を撃退し、陣地を確保した。しかし敵火による我が損害は少なくなく、この日の戦鬪で五中隊長 斉藤中尉の負傷と第六中隊長 渡辺中尉の戦死は既に伴第八中隊長亡き大隊にとり頗る大なる痛手であった。二十三日は一日中、敵逆襲の撃退に暮れた。

長家第二大隊長は、本夜暗を利用し戦線を整理すると共に明二十四日払暁を期し、第六中隊を以って教会陣地西側斜面陣地の攻撃を準備させた。この斜面陣地の側防火器が敵教会陣地の西方面から攻撃する場合に、我が迂回行動を不可能にするばかりでなく、敵の逆襲支援点となっているので教会陣地攻撃の自由を獲得する為には是が非でも、この陣地を奪取しなければならなかった。

二十四日六時頃、大隊長は本部と第六中隊を掲げて自ら陣頭に起ち斜面陣地に突撃を敢行、壮絶なる手榴弾戦を演じて遂にこれを奪取した。然し敵後方火点よりの射撃が猛烈で、これより戦果の拡張もできず一日中現在の線に於いて敵との撃ち合いに終わった。

大隊長は日没時、第五中隊長代理中村中尉に教会陣地の西北側斜面より敵障害物を突破して、教会陣地への夜襲を命じた。

二十五日午前四時過ぎ、第五中隊の一部は鹿砦を突破して敵陣内に突入したが、中隊主力は鹿砦付近に於いて敵銃砲火の集中を受け中村中隊長代理以下死傷者続出し、折角陣内に突入した一部も玉砕し、遂に本夜襲は不成功に終わった。

左猛進隊（歩五十八聯隊主力）は、三月十八日、七三七八高地の敵を攻撃した。同高地はこの附近一帯の最高地点でサンジャック敵陣地の前哨陣地であった。十八日正午過ぎ、尖兵第九中隊は戦鬪を開始したが、敵陣地前にて停滞し第十中隊は左迂回攻撃の命令を受け、午後四時頃突撃を実施するも不成功。

十八日夜、第十中隊の残部を八島少尉が指揮して裏より突入、十九日午前中陣内戦を続行した。十九日朝、敵兵逆襲して来たが、予知していたので難なく之を撃退し、同日正午頃七三七八高地の敵陣地を悉く奪取した。

当時左猛進隊と左突進隊司令部との連絡途絶のため、左猛進隊は爾後ウクルルを経て、二十四日正午頃サンジャックの新戦場に到着した。

「新発田聯隊史」より